



Vol.1 正直であれ

高木兼寛が生涯にわたって大切にされた徳目に「正直」というのがあった。子供や孫たちにも、ことある毎に、正直であれ、嘘をついてはいけない、人をだましてはいけない、とまるでお経を唱えるように諭したという。

兼寛のこの正直であれという教訓は、彼の幼少のころの忘れがたい苦い体験からきている。彼は幼時から漢学の塾に通っていたが、ある日、遊びが面白くなって、つい塾を休んでしまったことがあった。彼はそれを内緒にして、親には塾にいったことにしていたが、悪いことに整の先生がそのことをすっかり告げたために、父からきつい折檻をうけた。そしてその折檻の痕はながく残った。

その顛末はこのようであったという(兼寛晩年の講演より)。「私は武士の子で、大きくなれば武士になるべき筋合いのものでした。幼少の折から『武士は正直でなければならぬ』と教えられていましたが、ある時、偽りを言いました。すると父は、『かように嘘を言うものは、生かしておいても武士になることはできぬ。今日かぎり打ち殺してしまうから、さよう心得ろ』と、割薪で臀部をひどく打ちました。私が痛さに堪えかねて悲鳴をあげると、母がきて、一緒に詫言ってくれましたので、ようやく父の怒りも解けました。

私の臀部には、そのときの痕がながく残りましたが、母はそれを見るたびに、『お前はなぜ嘘を言ったか。人が見ていないからと思って悪事をして、神仏はそばからちゃんと眺めておられるから、始終表も裏も同じように努めねばならぬ』と涙を流して訓戒しました。

私の今日あるは、この父母の一拳に原因があるという差し支えありません」と。

筆者には、兼寛の人生にたいする基本姿勢は、この時にさだまったように思われる。「正直」をふくめて、すべての徳目を守るには、その背景にそれを支える神仏のはたらきが必要であるという姿勢もこの時にさだまったのである。

彼は明治36年ころ、自ら校長をつとめる東京慈恵医院医学専門学校で、彼独自の人間教育をはじめた。それは、それまでの経験から、医学教育には知識の教育だけでは不十分であり、必ずしも良医を育てることができないことを覚ったためであった。その独自の人間教育というのは、一つは入学試験に「品性試験」なるものを加えたことであり、もう一つは在学生に「明德会」なる精神修養の講座を設けたことであった。「品性試験」では、受験生に、どんな理想をもっているかとか、どんな宗教を信じているか、などを口頭試問して、とくに高い理想をもたない者や、宗教に無関心な粗野な人物は遠慮なく落第させたといわれる。

一方の「明德会」では、名僧高德を招いて講義をしていただき、それを全員で拝聴させた。

そもそも医師には、患者の苦しみ、痛みに共感し、これをいたわり、慰める感性が必要であるが、兼寛は、この「明德会」によってその感性を涵養するとともに、それが神仏の慈悲(愛)に根ざしていることを教えたかったものと思われる。

兼寛自身、英国留学時には毎週教会に通うほどキリスト教に接近し、また明德会を開くころは仏教に傾倒し、さらに晩年には神道に心酔していったが、それは、幼少の母から「神仏はいつもそばから眺めておられる」と訓戒されたその神仏のすがたを求める遍歴の旅だったのではなかろうか。

出典：法人広報誌「The JIKEI」第2号



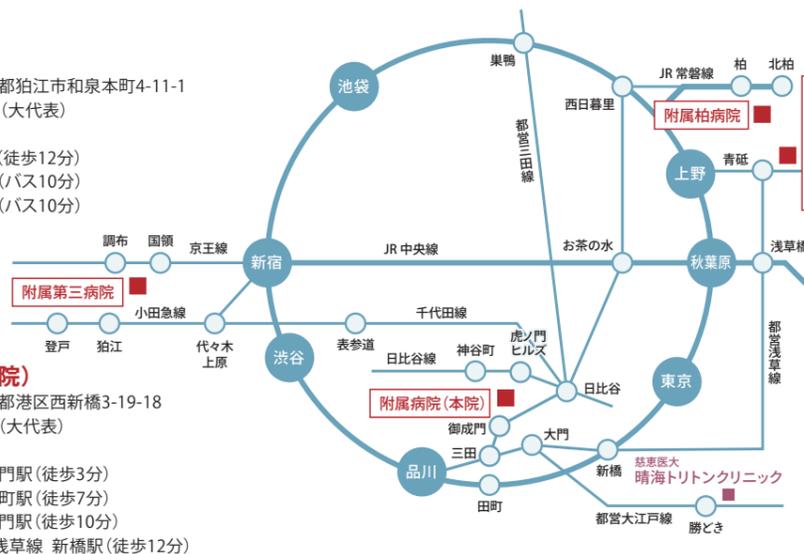
Access

第三病院
〒201-8601 東京都狛江市和泉本町4-11-1
☎03-3480-1151 (大代表)
Access
京王線 国領駅(徒歩12分)
京王線 調布駅(バス10分)
小田急線 狛江駅(バス10分)

附属病院(本院)
〒105-8471 東京都港区西新橋3-19-18
☎03-3433-1111 (大代表)
Access
都営三田線 御成門駅(徒歩3分)
日比谷線 神谷町駅(徒歩7分)
銀座線 虎ノ門駅(徒歩10分)
JR・銀座線・都営浅草線 新橋駅(徒歩12分)

柏病院
〒277-8567 千葉県柏市柏下163番地1
☎04-7164-1111 (大代表)
Access
JR常磐線 北柏駅
(徒歩10分/バス5分/タクシー5分)
JR常磐線 柏駅
(徒歩25分/バス15分/タクシー10分)

葛飾医療センター
〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2
☎03-3603-2111 (大代表)
Access
京成線 青砥駅
(徒歩10分/バス6分/タクシー5分)
JR常磐線 亀有駅
(バス10分/タクシー5分)



よつば 第2号



広報誌「よつば」について
東京慈恵会医科大学は4つの附属病院を有しています。「四つ葉のクローバー」のように4病院が有機的につながり合い、力を合わせ、患者さんを中心とした医療を実践していくという思いを込め、誌名としました。



Contents

- 第1回 慈恵人・勝沼 俊雄 第三病院 小児科 診療部長
- 葛飾医療センター 病院機能評価と当院の取り組み
 - Jikei History Vol.1 評伝 学祖 高木兼寛 正直であれ



東京慈恵会医科大学附属第三病院
小児科 診療部長
勝沼 俊雄 Toshio Katsunuma

Profile 東京慈恵会医科大学卒業後、国立小児病院アレルギー科を経て、英国Imperial College心肺研究所胸部疾患部門留学。帰国後、東京慈恵会医科大学小児科学講座助手、講師、准教授、教授。日本アレルギー学会専門医制度委員会委員長、「小児気管支喘息治療・管理ガイドライン」「アトピー性皮膚炎診療ガイドライン」作成委員などを歴任。日本アレルギー学会専門医、指導医。日本小児アレルギー学会理事。一般社団法人日本アレルギー疾患療養指導士認定機構 理事長。

このコーナーでは、慈恵大学の4つの附属病院で活躍されている教職員を「慈恵人」として紹介します。第1回は、附属第三病院(東京都狛江市)の小児科、勝沼診療部長をご紹介します。勝沼先生に現在附属第三病院小児科で取り組まれていることや、ご自身が「慈恵人」として日々から患者さんに対して心がけていることなどを伺いました。

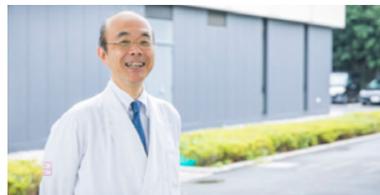
自己紹介 ~self-introduction~

慈恵大学附属病院を受診され「よつば」をお読み頂いている皆さま、一日も早いご回復を心よりお祈り申し上げます。

私は附属第三病院小児科で診療部長を務めております勝沼と申します。小児科医である私の使命は、未来を担うこどもたちの健やかな心身の成長をお支えることと心得ております。私ども小児科(東京慈恵会医科大学小児科学講座)は、2022年2月に創立100周年を迎えました。この伝統を守りつつ、最善の医療を目指して前進できるよう専心しております。

信念 ~belief~

私は慈恵大学の建学の精神である「病気を診ずして病人を診よ」を常に念頭に置いています。これは全ての慈恵人が共有する言葉であります。学祖 高木兼寛は「医学的力量的のみならず、人間的力量をも兼ね備えた医師の養成」を目指しました。この高木が遺した理念が皆様に十分届けられるよう願ってやみません。



お子さんとご家族に寄り添える心の通った医療を提供したい...

■ 附属第三病院小児科の特徴

私ども附属第三病院小児科の特徴については、次のとおりです。

1. 小児救急医療

特徴の一つ目は小児救急医療です。24時間365日、切れ目のない小児診療を展開し、近隣医療機関からの診療要請に常にお応えできるよう、努めております。

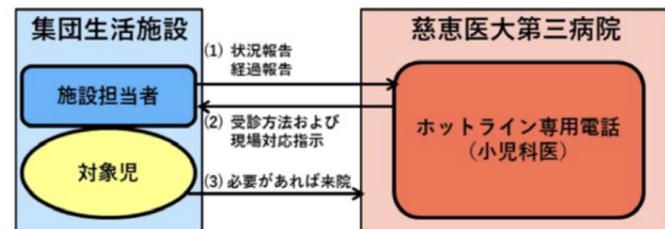
2. アレルギー診療の充実

二つ目はアレルギー診療の充実です。当科には6名のアレルギー専門医が診療に当たっています。

● 調布市・狛江市との協力事業「アレルギー対応ホットライン」¹⁾

当科は、調布市、狛江市と協力し、「アレルギーホットライン」事業を展開しています。本事業は、こどものアレルギー救急搬送や緊急時の判断等に関し、専用電話を介して私どもと学校・保育園・幼稚園などの現場とを結びつける仕組みであり、2013年から展開しています。

—調布市・狛江市アレルギー対応ホットライン—



● 20年以上続くこどものアレルギー勉強会「コンポリクラブ」²⁾

こどものアレルギー勉強会「コンポリクラブ」を20年以上継続して開催しています。

コンポリの「コン」は咳(コンコン)のコン、「ポリ」は皮膚のかゆみ(ポリポリ)のポリです。喘息やアトピー性皮膚炎といったアレルギー疾患について私どもと情報を共有して頂くための勉強会であり、患者さんや保護者のみならず一般の方、保育士さん等、こどものアレルギーに関心のある方ならどなたでも参加できる勉強会です。

● 最善・最新の医療を目指した臨床研究

私ども慈恵大学小児科(小児科学講座)は100年の伝統を持つ講座です。伝統に根ざしつつ、常に最善・最新の医療を目指して研究しています。現在展開中の主な研究テーマは「安全で効果的な食物アレルギー治療法の開発」です。具体的には牛乳アレルギーを治すための「低用量経口免疫治療の開発」と、卵アレルギーを治すための「舌下免疫治療の開発」を進めています。前者は文部科学省、後者は日本医療研究開発機構の公的研究費で研究を行っています。近い将来、食物アレルギーで悩むこどもたちやご家族の福音となることを夢見しています。

第三病院小児科アレルギー解説ページ

喘息



食物アレルギー



アトピー性皮膚炎



花粉症・アレルギー性鼻炎



~第三者機関による病院機能チェック~

病院機能評価受審、認定に至るまで

—地域に根ざし、安全・安心、信頼と納得の得られる医療サービスの提供—

葛飾医療センターでは、2022年2月に公益財団法人日本医療機能評価機構が実施する病院機能評価を受審し、2回目の「認定」を受けることが出来ました。

病院機能評価とはどのようなものか、また認定をうけるまでの当院の取り組みについてご紹介いたします。

「病院機能評価」とは、質の高い医療サービス提供に向けた、公的な第三者による評価システムです

アメリカやイギリスでは、古くからこのような取り組みが行われていましたが、日本では行われて来ませんでした。

そのため、1995年に医療機関の機能を中立的な第三者の立場で評価し、質の高い医療サービスを提供していくための支援を目的に、1997年から日本医療機能評価機構による本審査が開始されました。書面による審査後、評価調査者(サーベイヤー)審査員が病院に出向き、多岐にわたる調査項目について確認を行う訪問審査を行います。



「認定」後には機構のWebページに病院名が掲載されています。

◆ 第1回認定 ◆ 2017年2月「認定病院」に認定

~他病院に先駆けた、入退院・医療連携センター「PFM」が高く評価されました~

当院は、2012年1月にリニューアルオープンしましたが、リニューアル後の病院では「総合診療体制・救急医療体制を強化した地域密着型の病院」として、地域医療に貢献すべく取り組んでいます。この取り組みをより一層深化させるため、開院から5年目となる2017年に病院機能評価を受審いたしました。当院ではこの受審にあたり、1年ほど前から、病院全体で課題事項を洗い出し、改善の取り組みを行いました。その結果、2017年2月の受審時には、日本医療機能評価機構から高い評価を得て「認定病院」になることが出来ました。

当院で高い評価を受けた項目は、入退院・医療連携センターのシステムであるPFM(Patient Flow Management)です。入退院・医療連携センターでは、入院から退院後まで、患者さんを支援する枠組みを構築して参りましたが、このような取り組みは他病院に先駆けたものでした。その他にも、患者さんの安全確保に向けた体制の整備や薬剤管理の取り組みなどが高く評価されました。

葛飾医療センター 病院機能評価の受審までの流れ

2012年1月 リニューアルオープン

2017年2月 病院機能評価を受審し、5月に認定病院となる

2022年2月 2回目の病院機能評価を受審、5月に認定更新

◆ 第2回認定 ◆ 2022年2月「認定病院」に

~文書管理体制の強化など、更なる改善を実施し、再び「認定病院」に~

「認定病院」となった後、継続的に認定されるためには5年に1度、再度、審査を受ける必要があります。そのため、当院では2022年の2回目の受審において、前回、課題の残った項目を改善することを目標に取り組みました。

例えば、病院内の文書管理の方法について指摘を受けましたので、文書管理のルールづくりを行い、管理体制を強化しております。これらの取り組みの結果、2回目の受審でも「認定」を受けることが出来ました。2回目の審査は2月に行われたため、新型コロナウイルス感染症の検査、診療と並行する形で実施されました。そのような中においても病院機能評価で「認定」されたことは、当院のスタッフが限られた時間の中で全力を尽くした成果であったと思います。

当院では、今後とも「総合診療体制・救急医療体制を強化した地域密着型の病院」として、地域の医療に貢献して参ります。

